

加賀藩と室鳩巢 葛巻昌興との交流 その 4一附・昌興日記に見る鳩巢詩一

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-05-12 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00065954

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



四九・アトコヒ五妙境界…「五妙境界」は注二四参照。ここでは天道の描写として用いている。「あどこぶ」は、ここではその環境に身を置くこと。原義は股にかけて越える意で、「あふどこぶ」の転。

五〇・四域自在…「四域」は、須弥山の周囲の四洲のこと。智顛「法華玄義」卷一上「輪王於四域自在、釈王於三十三天自在、大梵於三界自在」(338a10-11)に基づく表現。

五一・四海八埏…全世界、天下。「四海」は国の四方の海、「八埏」は地の八方の果ての意。

五二・儲皇仙院…「儲皇」は東宮、「仙院」は上皇。

五三・龍樓耶山…「龍樓」は東宮御所。「耶山」は「姑射山」に同じく、院御所。

五四・国母摩耶／皇后姝女…「国母摩耶」は国王の母親。釈尊の母・摩耶夫人の名から。「姝女」は女官で、「姝女」とも書く。参考、「国母摩耶、諸宮姝女」(「阿婆縛抄」所引「明匠略伝」)。

五五・生積善家／以戒善余慶…皇族をいう。皇族として生を享けたのは前世の善根ゆえだとする理解に基づく。「積善之家必有余慶」(「易経」文言伝に基づく成句)を踏まえた表現。「戒善」は戒を守ることよって得る善。

五六・キサスモ仏法叡慮…(御心を込めて仏法のことを考えるのも)。「剋す」は心を込める意で、「剋意」(心を込める、専心の意)等の熟語がある。

五七・姑耶山風和扇、随日昇進…「姑耶山」は院御所。参考、「曲阜之風和扇」(「澄憲作文集」第四大臣。「曲阜」は撰政の意)、「門前為市、昇進叶心、倒商折華、加階隨思」(同・第二十三山王。「倒商」

は「堂上」の宛字で、「本朝文粹」卷六・請被特蒙天恩兼任民部大輔闕状(橘直幹)の「堂上如華、門前成市」を踏まえるか)。

五八・蓬萊洞…内裏をさす。「和漢朗詠集」卷上・菊「蘭蕙苑風摧紫後、蓬萊洞月照霜中」(二七一番菅原文時)、国会本朗詠注「又云、蓬萊洞者、内裏也」。参考、「蓬萊洞問、万年之龜鶴並宝算」(「澄憲作文集」第一国王)。

五九・風月業…漢詩文の道。参考、「天満自在天神…就中文道之大祖、風月之本主也」(「本朝文粹」卷十三・北野天神供御幣并種々物文・大江匡衡)。

六〇・文章家…漢文学の家。

六一・高位崇班…「崇班」は高貴な身分の意。
六二・俗僧…真福寺本の送仮名「マレ」(二箇所)は「もあれ」の転。「……まれ……まれ」の表現は、唱導資料中では「尊勝院弁曉説草」等に多用される。

加賀藩と室鳩巢

葛巻昌興との交流 その4

—附・昌興日記に見る鳩巢詩—

畑中 榮

8 元禄四年

元日は昌興にとって特別の日である。未明の寅の刻に起きて沐浴して髪を梳き、六時頃に髪のしめ斗目のついた小袖に長袴を身につけて観月亭に入る。そして焼香して柿本人麿の聖像を拝し、「若」の和歌を吟じて、文臺の料紙と硯を執って試筆を行う。先ず綱紀の治世を祝って二首詠じ、ついで迎春の和歌を詠う。

賀をくはふるくにの時津風のどけき松の千代の初春
今朝はまづ心の花の紐とけてやまは霞のころも着にけり
春きぬと軒の雫に音づれて朝戸出かすむ雪の山の端

「賀」は「ことほぎ」と読むのである。身を浄め衣服を正して柿本人麿の聖像を拝して行う一連の所作は、いわゆる「人麿影供」や佛家に伝えられた「柿本講式」の流れを受けるように見える。殊に人麿の聖像を拝して「若」の和歌を詠じるとあるのを踏まえると、この和歌は「柿本講式」で頌詠する、「あすからは若なつまむと片岡のあしたの原はけふぞやくめる」をいうと思われし、また寛永二十

年(一六四三)六月、藤原爲景が祖父の囊中より見いだした人麿の肖像を新しく装幀して、影供詩歌を催したという記事も(注1)、そうした流れのあった事を示す。かつて平安末の永久六年(一一一八)藤原敦光や藤原俊頼等によって行われた影供の、微かではあれ残り香が、加賀という一地方官吏にまで及んでいることに、多少の感慨を抱かずにはおれない(注2)。

もちろん昌興の所作は当時学問を志す人々に共通する態度ではある。たとえば延宝九年(一六八一)、鳩巢が北野廟に学問成就を祈願した誓文に、「毎朝、案つえんに對ひて先づ衣帯を整へ、乃ち一坐了り、事故有るに非ざれば妄みだりに動くべからず」といい(注3)、また大田錦城の春草堂塾則にも、「清曉に起きて丙夜へいやに寝ね、その間宜しく孜々然ししぜんとして勉むべし。若し怠慢の念を生ずれば、則ち或は筆硯を正し、或は几案つえんを拭き或は詩賦を歌ひ、或は容を正して拱手くわんしゅし、戸外に散歩して宜しく務めて神氣をして精亮しやうりやうならしむべし」とある(注4)。

加えて『正徹物語』によると、藤原定家の言として、家に在って歌を案ずる場合、必ず南面の障子を開いて遠くを望み、衣を整えて

正座し、「故郷有母秋風涙。旅館無人暮雨魂」と、「蘭省花時錦帳下。廬山雨夜草庵中」の句を吟ずるのを常としたという。こうすればその心は深く、調も自ら高くなつていったというが、和歌を志す昌興もまた、こうした生活様式をも求めていたのかもしれない。

そして三日の「日記」(『昌興日記』以下同様)に、この年の儒者達の歳旦の作が披瀝される。源剛伯を始めとして鳩巢・助信の三儒そして本多政冬の詩、浅井政右や御馬廻組頭山崎延隆とその嫡子作隆(注5)・多賀直方の和歌、横山正房の発句などである。当然「日記」に残されない作も多数あつたと思われるから、文化への志向の高まりが推測される。いづれも奥小将組を中心とした綱紀のブレーンであるが、横山正房は横山家支家として綱紀に重用され、後に家老職を世襲した家柄である。今一々は載せぬが、剛伯・政冬の作を掲げてその様子を示す。ちなみに政冬は、加賀八家筆頭本多氏の支家で、一萬一千石を食んで家老職に就く老臣である。

歳旦 剛伯 夢・中・融・風(上平一東)

残夜鐘邊盡 喚醒舊歲夢 寒光松竹外 禽語雪花中

北海恩波闊 南山壽色融 揮毫何所樂 吟詠坐春風

〔訓読〕残夜は鐘辺に尽き。喚醒す。旧歳の夢。寒光松竹の外。禽語雪花の中。北海に恩波闊り。南山に壽色融る。毫を揮ひて何の樂しお所ぞ。吟詠して春風に坐す。

歳旦 本多政冬 明・鶯(下平八庚)

風起上金城 祥雲和雪明 退公艸椒酒 依舊待新鶯

〔訓読〕風起ち。金城に上り。祥雲。雪明に和す。公を退き椒酒を艸み。旧に依りて新鶯を待つ。

剛伯は詠う。除夜の鐘の響きが消えると共に歳が明け、万年を寿ぐ喜びを、厳寒にも色を変えぬ松竹の枝で鳥達までもが祝福する。この加賀藩では藩主の恵みがあまねく行き渡り、万代に渡って崩れぬ南山のような御代を、自分はその慈しみを浴びながら詠う。これこそは忠恕の行き渡った御代の樂というものだ、と。また政冬は、金城に目出度い気が満ちて国を包み、家臣は主の恩恵による温和な新年を祝って酒を酌みつつ、春を喜ぶ鶯の声を待つと詠する。

昌興は折りにふれて作歌に余念はなかったが、二月二十五日京の有栖川幸仁親王の手になる和歌の添削を得たことは、名譽至極の出来事だった。幸仁親王は後水尾天皇の宮家にあたり、それまで花町宮とも桃園宮とも称していたが、幸仁親王より有栖川宮家を称し、以後綿々と続いて大正時代となって高松宮と改められた由緒を持つ。代々学芸の嗜みが深く、歌道の宗師として仰がれていた。昌興がその添削を得て、「頗る恐悦の義、何を以て之に比せん」と感激したのももつともである。

やがて参勤で江戸に参向したのは四月八日である。その頃から昌興は体調を崩した。そんな五月中旬、鳩巢より病氣見舞いの消息があつて一首も添えられていた。

夏日即事 鳩巢 苔・灰・催・哀(上平十灰)

空庭經雨後 日日長青苔 林暝樹如烟 天低雲似灰

故園梅已熟 客舍笋將催 蜀魄不飛去 聲聲猶吐哀

〔訓読〕空庭雨を経て後。日々青苔を長す。林暝くして樹咽る如く。天低れて雲灰に似たり。故園梅已に熟すや。客舍笋將に催さんとす。蜀魄飛び去らず。声々猶ほ哀を吐く。

いづれも昌興の求めによる作である。八月十五日は早朝よりの雷混じりの雨が収まり、夕方には雲間から僅かに月も見えたが八時過ぎになるとまたすっかり曇り、晴雨定まらなかつた。昌興は思へども心のくまもはてぞなき名高き月もくもる習を時こそあれ雲の衣のうらみより秋を思はぬ月ぞあやなきと詠み、翌日には綱紀から求められて献じた小瀬助信・鳩巢・竹隠・順庵・寅亮親子の作が記される。更に閏八月九日には、金沢の本多政在の仙遊臺で詠まれた「中秋」の発句や賦詩が送られて来て、それを記す。ここでは鳩巢と本多政在の作を載せる。

中秋書懷 鳩巢 収・悠・求・秋・州(下平十一尤)

雨散前林烟未収 清風白露思悠悠

雲端仙鏡有時見 池底影娥何處求

寒雁難傳千里信 候蟲空報四隣秋

今宵料得同寅會 一座笑談在北州

〔訓読〕雨散りて見ゆるも。池底の影娥。何處にか求めん。寒雁伝へ難し。千里の信。候蟲空しく報ず。四隣の秋。今宵料り得たり同寅の會。一座の笑談。北州に在り。

雨は木々を濡らして収まらず、清風白露は求めようもなく思いだけが止まない。雲の端から月が時に顔を出したりするが、すぐに隠れて見えなくなる。故郷から便りもないが、それは雲が厚くて雁の姿も見えないからだし、蟋蟀も空しく鳴いて秋の訪れを告げるだけだ。推して思うに今頃故郷でも、同僚が一堂に会して中秋を詠って

季節は梅雨、一雨毎に青苔は丈を伸ばし、樹はその一帯を暝くして成長している。故郷の家ではもう梅の実は熟しただろうか。江戸では筍が芽を出し杜鵑も鳴きだした。だけど杜鵑は故園に飛び立つことも出来ず哀しく歌うだけだ、と。「文集」巻二に収められている五律であるが(注6)、遠く隔たった故郷への思いに感極まった昌興は末字の「哀」に和して詠じた。

ほととぎすみくさの友もなき宿をたえず音なふ聲の哀さ

「みくさの友」は葦で葺いた仮廬で語らった昌興や鳩巢。更に翌日には田中一閑より、「心地例ならずなやみ給ふとなん閑侍りて」とあつて、次の見舞いも受けた。

日に夜を継て仕し人なれば身にいたつきの積りとやるし

所労が少し癒えたのは七月に入ってからで、七日には七夕の和歌を七首詠じ、十二日は父の三十三回忌にあつたので、江戸浅草の観音院に使者をもつて焼香料と和歌を献じた。金沢の松月寺には既に三月、仏事供養を済ませ偈ぶ和歌も献じてきていた。そして二十四日、昨秋木下順庵に依頼した三首の添削を受け取り、翌日にも「山居」の七絶を賦した。

そして八月四日、造営を終えた会津の土津神社の大祭の執行について、太刀や灯籠・御馬を献上して参詣すべく、田中一閑と前田権佐恒長が綱紀の代参として出発した。会津は綱紀の正室摩須の父、保科正之の治める国である。灯籠には順庵の銘文が記されてあつた(注7)。昌興は饒別の和歌を贈り、一閑からは道中記を兼ねた和歌も贈られた。そして八日、先述の「山居」詩に和した鳩巢の作が届けられ、十二日にも助信から、十八日には原元寅からも贈られてきた。

いるであろう。自分達も今中秋を詠っているが、話題はどうしても北州加賀のことになってしまふのだ、と。助信の作にも「燈華復た交歓を罄し難し」とあるように、江戸にいて友人と話している、話題はどうしても故郷のことになったのである。

金沢では本多政在の仙遊臺で、一族の政長・政冬に加えて桜井知親・小松梅林院別当能順・板津直景等多数集って、発句や詩歌を賦して一晚を過ごしたらしい。^{注8}次に政在の作を掲げる。

中秋賞月仙臺 政在 商・香・光・觴・腸(下平七陽)

爽風薄暮度清商 仰見月華吐桂香

雪満山巒千片影 珠浮池水一團光

何須詩席秉蘭燭 好是仙臺飛羽觴

檻外夜遊無限意 興來興趣慰吟腸

「訓読」爽風薄暮 清商を度る。仰ぎて見る 月華 桂香を吐くを。

雪は山巒に満つ 千片の影。珠は池水に浮かぶ 一団の光。何ぞ

須ひん 詩席に蘭燭を秉ることを。好し是れ仙臺に羽觴を飛ばす。

檻外 夜遊 限り無き意。興来り興趣く 吟腸を慰めむ。

頸聯に「雪」とあるのは、「可観小説」では「霜」とある。中秋は

江戸では雨だった、金沢では晴れて月が桂香を吐き、その千片の

光の筋が山々を照らし、仙遊臺の池底には珠のような月が影を写し

た。この月の下、蘭燭を秉って夜遊することはない。月と共に興が

来てやがて月の沈むにつれて興も急ぎ足で去ってゆく。だからさあ、

心ゆくまで吟情を慰めよう、と。

金沢から中秋の様子を江戸に知らされた七日後、人々から人望が

篤かった浅井源右衛門政右が四日に卒したとの報がもたらされた。

父一政は利常に仕えて光高の側用人となり、その没により柩に従って金沢に帰り殉死した人。政右はその嫡で、父の遺知を嗣いで大小將頭から馬廻組頭に進んだが病のため天和二年(一六八二)罷めて自適していた。洒脱な人柄で茶を嗜み、和歌を善くし連歌に長じて能書でもあった。「日記」には「十五六ヶ年来病氣に付不能出仕也。春秋六十八にて、其先御馬廻頭也。政右、とし比連歌を好み、凡於金陵其ならびなかりしことなど思ひつつけて

よしや身はあだなる露にたぐふとも詞の花は世にも朽せし」とある。故郷では竹田忠張・本多政長や政在・菊池武康(政右の弟)・山崎延隆・由比正及・前波正晴等古参の藩士や親縁者に加えて、京都北野神社別当能舜の息で最も連歌を能くし、明暦三年(一六五七)新成された小松天満宮の初代別当となった能順や高岡町人某等多彩な人々によつて追悼句会も催された。^{注9}

次いで閏八月二十五日の明け方、駒込の藩邸より急用で呼び出され病をおして出向いた帰り

身のほどの憂を思へば是や此世につながるる駒込の里

と詠んだ歌を鳩巢に送ると、二十八日には次の一首が贈られてきた。

有感 鳩巢 裳・忙・僵(下平七陽)

欲曙郎君顛倒裳 自公來召吏人忙

中庭若使鉏斃看 不惜碎頭槐下僵

「訓読」曙けんと欲て郎君 裳を顛倒す。公自ら来り召せば吏人忙がはし。中庭若し鉏斃を使って看せしめば。頭を砕きて槐下に僵るを惜しまざらん。

小役人たる昌興が、早朝の喚びだしにもかかわらず忙しく立ち働

いているが、これを「鉏斃」が見たら、その忠勤ぶりに感動して己の頭を砕いて槐下に捨ててゆくだろう、と。鉏斃の逸話は「蒙求」「鉏斃触槐」によるもの。これを得て昌興が謝して歌う。

鳥鳴てまつあかつきはかたくともつかふる道になづまざるがな

やがて十月、昌興は仕事に就けぬほど病んだ。そんな昌興を見舞

て鳩巢は近作の「秋懷」十首を披瀝してくれた。感興やまぬ昌興は

病床より起きてこれを筆写した。作にいう。「立秋の後は雨が多くて

客の訪れもなく、酒が熟しても寂しい限りだ。風も寒さが増して木々

も葉を落とし、こんな時は思郷の念は殊に止みがたいが、「歸ること

得ず。猶ほ覺ゆ 月程の遙けきこと」と。江戸はもう鳩巢にとつ

て家郷とはいえず、「啄梁求自足。反哺意還深。儒客爲形役。低頭

愧二禽」とも嘆く。^{注10}。「二禽」とは、池中に遊ぶ雁。「梁」は粟で、

飢えた雁が粟をついばんで自足しようとしているが、彼等も「反哺」

の心が深いのだ。自分は儒客として仕えているので、反哺の恩も尽

くせぬのが恥ずかしく、二禽に顔向けできぬ、と。帰藩は翌年九月で、

ほぼ一年後である。昌興は応える、たとえ病中にあつても「孤松霜

に色を結ぶ」節操は変えまい、と。

初冬書懷 昌興 生・清・聲(下平八庚)

人間憂樂自相生 閑坐感時心更清

檻外孤松霜結色 臆前落木雨添聲

「訓読」人間の憂樂 自ら相ひ生ず。閑坐して時に感ず 心更に清き

を。檻外の孤松に霜に結ぶ色。臆前の落木に雨に添ふ声。

そして詩の後に付けた。

心あれや常盤の松も紅葉ばもおなじ夕の木がらしのかぜ

やがて二十日、京へ入木道の修練のため持明院基時の下で励んで

いた山本惟明が、秘伝の奥義を伝授されて帰ってきて、名も基庸と改めた。持明院家は江戸時代を通じて入木道の宗家として君臨した公卿で、宮廷の書き役を勤めていた。藤原行成を祖とし、室町末期に断絶していた世尊寺流を基春が相伝したことに始まる。基時はそれより七代目で、寛永十二年(一六三五)に生まれ、五歳で叙爵され元禄三年五十六歳で従二位権中納言となったが、十二月辞して四年には散位となっていた。^{注11}。基庸はこれ以降佐々木志頭摩と共に藩に並び立つ書家となる。

二十二日は、書家として招かれ十月二日に病没した桜井正可の三七日で、昌興はその仏事に寄せて和歌を贈った。正可は綱紀の右筆を勤めて天和二年(一六八二)御馬廻組に班され、二百五十石を食んでいた。その息を知親といい、昌興と意を通じている。^{注12}。次いで二十五日、白銀師後藤演乘の京における宅地や園池、更に渚月亭という茶亭の美景に和歌を賦詠して贈った。後藤家は名工祐乗の流れを汲む彫金師で、利家の代より禄されて京に居を置いたまま三十人扶持を食み、隔年おきに金沢に赴いて製作に従事していた。^{注13}。

更に翌日には京の呉服商大森好治より書状を受け、千宗室の動静を得た。好治もまたその祖より利家の用命を奉じ、父の代より三十人扶持を与えられて京より呉服等の調達を命じられ、一方で綱紀より加賀藩の茶道具奉行に命じられて百五十石を食んでいた千宗室との交誼をも得ている。宗室は加賀に裏千家の一派を立て、貞享五年には玉泉院丸庭園の築造も命じられていた。好治は宗室と共に

高雄に紅葉狩りに出かけ、紅葉の幾枚かを拾って和歌に添えて昌興に送ってくれたのである。昌興は翌月一日にその返書をしたためた。綱紀の代になって文化人との交遊はますます多岐にわたり頻度も増し、奥小將昌興においても公私ともに交遊の機会を増していた。

この後も昌興の和歌活動は続く。山本基庸とは入木道の心について和歌をもって応答し、時には竹隠、竹田忠張^{注17}・田中一閑等とも詩や和歌をもって殆ど毎日応答している。また時には基庸を通じて、京における最近の歌学の動静についての情報を得ている。それによると、日野弘資・資茂父子が貞享四年に相次いで没してより、和歌の合点を依頼すべき適当な宛がないということである^{注18}。日野家は代々儒道や歌道をもって朝廷に仕え、江戸時代には家禄として千石余りを禄されて武家伝奏を勤め、幕府と朝廷との間や朝廷にあっても宮家や摂家との間を取り持つて、大変重要な役割を担っていた。昌興は有栖川幸仁親王や近衛閑白基熙^{もひろ}・権大納言清水谷實業等の名を挙げているが、いづれも歌人として古今伝授を受けたという名家ばかりで敷居が高すぎた。山本基庸によれば、持明院基時の見立ては以下のものであった（取意）。

日野殿のような人は他にいないであろう。有栖川殿は身分が高すぎるし、清水谷殿は諸家との交わりが多すぎて纏まりがつかない。また近衛殿は古今伝授を受けているとはいえ、添削の依頼に応ずるのは公家の一部に限られ、基時さえ有栖川殿等に相談している程である。これ以外に武者小路實陰を掲げるが、實陰はこの年三十一歳で、鋭意粉骨最中の若輩のこととて遠慮がちである。従って竹内殿が冷泉家の歌道を嗣ぐ家柄でもあり、この際最も適

任である。後藤演乘に相談してみても同様の返事であった。

ここで話題に上っている武者小路実陰は、歌人として最も聞こえた公家。実父も歌人だったが、後水尾院侍従の武者小路公種の養子となり、貞享四年二十七歳で従四位下に叙されて靈元院より天爾遠波伝授を受け、元禄四年には三十一歳で正四位下となっていた。これ以降実陰は歌学の才能を磨いて古今伝授を受け、晩年には中御門天皇やその東宮の和歌の添削を担当し、更には伊勢物語伝授に携わったりして従一位に上った。一方竹内殿は、笙や歌学を能くした家系にあつて、冷泉家の歌人として聞こえた惟庸をいう。寛永十七年に生まれ、二十八歳で叙爵され天和三年四十五歳で散位非参議ながら従三位となり、以後刑部卿を兼ねて元禄四年には五十二歳で正三位となっていた^{注19}。いづれも家柄としては高くはなかったが、和歌の伝統を受け継ぐべき実力と重きを増す公家であつた。

そうこうして十一月十六日には初雪が降った。雪を見るとやはり昌興は金沢が懐かしく五首を詠じて竹田忠張や鳩巢に贈った。次はその内の一首。

故郷の夢を残して起きいづる草のいほりの今朝のはつ雪
すると翌日、忠張や鳩巢から応和の詩が贈られてきた。

酬藤有禎父病中賦初雪和歌見示 鳩巢

海風吹雪到簷端 寒入曙廳夢半殘

臥病日高知未起 故人清節似袁安 端・殘・安（上平十四寒）

「訓読」海風雪を吹きて簷端に到る。寒は曙廳に入りて夢は半ば残る。臥病して日高しといふ 知る 未だ起たざるを。故人の清節袁安に似る。

袁安は、後漢汝陽の人。公にもこのいう時は、いつも流涕して赤誠を示して論じ、その威厳があり厳正な態度は、大臣や天子から信頼されて孝廉に挙げられたという^{注20}。病でもなければ日高くまで臥すことのない昌興の、勤勉な清節を袁安に比するのである。先掲の「初冬書懷」詩にも「閑坐感時心更清。簾外孤松霜結色」とあつたが、霜を受け雪を受けても緑青を結ぶ松の操に似て、苦しいからこそ節義を保とうとするその姿勢は、嘆賞に値した。昌興はこの詩を写した後で、「今朝之第二句此間之病体別て甘心候」ともその「日記」に記すが、その心情をいい得た作であつたのであろう。

ついで二十五日、木下順庵が松平大和守直矩の五十賀の宴に招請され、「對松争齡」題で賦詩したことを記す。直矩は家康の次男秀康の五男直基の嗣で、この年五十歳で出羽山形に封ぜられていた。この間運命の悪戯によって閉門減封を閲して姫路から日田に移され、更に五年前には三萬石の加封があつたが山形に六度目の移封を遂げていた。移封のあまりの多さに世から「引越大名」と揶揄されていた。順庵がその祝席に招請された理由は明らかではないが、直矩は徳川氏直系の大名だったから、既に幕府の儒者として重きを成していた順庵が招かれたのであろう^{注21}。昌興が日記に書き残した理由も不明であるが、如上の世評による好奇によるだろうか。

對松争齡 木下順庵 榮・嶽・争（下平八庚）

松緑貫時日向榮 高人壽色自崢嶸

拾遺超過大夫爵 千載讓登君子爭

「訓読」松の緑は時を貫ねて日ごとに榮に向かふ。高人の壽色も自から崢嶸たり。拾遺は超過す 大夫の爵 千載の讓登は君子の争ひたり。

「拾遺は超過す大夫の爵」とは、直矩の爵位が従四位下侍従であることを踏まえ、貞節と称えられる松の五大夫をはるかに越えることと称える。なお拾遺は、主の闕を補いその過失を諫める官の称で、こは侍従の職をいうが、同時に様々な運命に翻弄されて転変を繰り返しつつ、官禄と命運を拾い採ってこれまで経てきた直矩の数寄な五十年もいうのであろう。いろんな苦境にもめげなかつた直矩は、翌五年七月にも五萬石を増され更に陸奥白河に移ることになる。

しかし直矩は、このような運命にも決して挫けることなく、超然として受け入れて来たのであろう。その生き様は、松に等しく高い節操と君子然たる「讓登」の礼を失わない在りようだと称讃する。「論語」八佾に「君子は争ふ所無し。必ずや射か。揖讓して登り降り、而して飲ましむ。其の争ひや君子なり」とあるのをひくもの。君子は他と争うことはないが、争うとすれば弓試合（射）である。その時も試合に参加する者は、中庭から堂に上つて主催者に挨拶し、堂を降りる時には揖の礼（両手を前に組み合わせる）を終えた後、相手に対しても讓の礼（相手に先を讓る）を尽くして射を始める。更に射が終わっても勝者は敗者に罰杯を勧めて礼を尽くすのである。今松平公と松が長寿と爵位を争うのは、射における争いと同様君子の争いだ。直矩の面目を見事に保つた作であつた。

やがて十二月六日には、桜井親規より喪にある愁鬱の和歌を贈られそれに返した。中陰は先述したように終わっていたが、三年の喪にあつたのである。

さして行く法の船にはともなはで残る恨にぬる、袖かな
と詠う知親に対して昌興は

彼岸にさし行舟もなき跡をとぶらふ法に真帆やひくらんと歌い返した。病気はその頃には小康を得たのだからか、八日には出仕して邸の前庭の雪を詠じたり、山本基庸と贈答したりで暮れた。次は晦日に詠った歳暮の和歌二首である。

暮はつるけふにくやしきをこたりに年月などか思はざりけん
呉竹のうきふしそへてゆく年を心にこめておしむはかなき

年が暮れるにつけて、日頃の「をこたり」を悔やみ、行く年の「憂きふし」をうらみつ、去りゆく年を惜しむ心を喩うのである。

9 元禄五年

江戸での元旦、昌興は綱紀の下を夜十時頃退下し、試筆の和歌を十首あまり詠じた。鳩巢と小瀬助信は七律、田中一閑の嗣式泰は七絶、竹隠は五律を賦し、一閑・竹田忠張・里見元辰・多賀直方は和歌や発句を詠じた^(注19)。鳩巢は作の中で、「文教風を移して邦に道有り。陽和物を照め化に蹤無し。故園去きて多幸を誇るべく。林廟新成して禮容を瞻る」と賦したが^(注20)、これは昨年二月に日本で最初の官立学校である昌平坂学問所が完成し、武断から文教へ風を移す道が明確に示され、世を挙げて行われることになったことをいう。武威の厳冬から忠孝を基とする溫和で煦かな風が、旧習を跡もなく包み込み、かつて慣れ親しんだ故園を棄て去り、未来の幸を誇るに足るべく聖堂が成った。かくして儒学の教化によって礼をもって容を正す未来の人々の姿が見える、と。
そして田中式泰も賦す。

元旦 田中式泰 新・民・仁(上平十一真)

鳳曆頒春風物新 東皇德澤及斯民
書林迎歲愛遲日 資父事君又輔仁
「訓読」鳳曆春を頒ちて風物新たまり。東皇の德澤は斯民に及ぶ。書林、歳を迎へて遅日を愛す。父を資け君に事へ又仁を輔く。

元旦と共に風物は改まり、春の徳沢は衆庶の隅々にまで行き渡っている。そして学林でもまた清新な春の恵みの下、文化の治政に従って父を資け君に事え、こうして友人達と共に仁の徳をおし広めて行くのだ、と。これこそは新しい時代を導くべき風教であった。

そして一月十五日、鳩巢の手になる『名君家訓』が成って発刊された。道徳や道義が廢れた澆季の世を改め風俗を正すため、君主に成り代わって治世の在り方を二十条にわたって述べたものである。その序にいう。

世澆季におよび、人の心すなほならず、風俗日にくだりぬ。是を改めん事は上に其器にあたる君出いましめ給はずしては、下たる人の力およぶべき處にあらず。されば上たる人にかはり下知の言葉にならひて、思ひよる事共條子をたてて記し置きて自他の戒とす。

武士は学問して節義・礼讓を身につけ、風俗を正し武備を忘れず生活するよう心得を説く。一方で家庭にあつては、孝養を第一に重んじ、父母の喪に当っては礼法を守って恩義の理念を失わぬよう心懸ける。かくして家庭における長幼等の秩序を始め、天下四民に及ぶまでその秩序を損なわず、正しい義理を守って生きるよう説き示す。それは、家父長制の堅持に基づいて、封建制における武家政治

の維持に及ぼうとする道徳経の教示であった。

やがて二月十三日、綱紀の四男吉徳の髪置の賀が行われた。吉徳は元禄三年八月八日江戸に生まれ、勝次郎と称されていた。三歳になつたので、老年の家臣の白髪を献じて末永い長寿を保つよう願う儀式である。この度は、定番頭である野村与三兵衛重徳が白髪を献じた。民間では、松竹梅の造花を末広の上に載せて飾り、氏神に参詣して銅頭魚の祝膳で祝った。次は昌興の祝歌である。

おひ添て松に交せる梅がえや千歳の春のかざしなるらん

三月二日は桜井知親の父正可の忌日で、寺に詣でた知親が帰り道の桜の枝を手折って鳩巢の宿舎を訪れた。鳩巢はすぐ助信や基庸を招いて賞春の嘉会を持った。

折花入隣家 知親 還・閑(上平十五刪)

寺院香林春寂寞 路傍立馬折花還

騷人報我有佳句 幸得樽前半日閑

「訓読」寺院の香林、春寂寞。路傍に馬を立め花を折りて還る。騷人に報ゆるに佳句有り。幸に得たり。樽前半日の閑。

花下與友人酌酒 鳩巢主人 来・杯・回(上平十灰)

隣人有意折花來 相對殷勤停酒杯

吾生縱得古稀壽 自此逢春三十回

「訓読」隣人意有りて花を折りて來る。相ひ對して殷勤に酒杯を停む。吾生、縦ひ古稀壽を得れど。此より春に逢ふこと三十回ならむ。

鳩巢詩の後に注している。「基庸云く、吾徒、七十の壽を保つと雖も、自今花を看ること三十度に過ぎず。坐客、賞嘆すること久し。故に詩此に及ぶ」と。知親の宿舎は鳩巢の隣にあつたのだから、

この時の参会者の年齢を見ると、昌興・助信・知識は三十七歳、基庸は三十六歳鳩巢は三十五歳で、共に同年代で気心のよく通じた友人達であった。今後たとえ古稀まで寿命を保てたとしても、こうして桜を見る機会は三十回を数えるに過ぎぬ。ましてこのように和暖な春、このような友とこのように心おきなく楽しめる「佳夕」はきつとそんなにないであろう。だからさあ、心ゆくまで杯を傾けようではないか、と。基庸も歌う。

あかず猶まもり暮さむ櫻花としにふたたびみるとなければ

二日後鳩巢は師順庵を訪ねた。綱紀の命によるものである。順庵は江戸では神田稚橋に居を定めていた^(注21)。本郷から順庵邸までは、どれほどの道のりでのどのような経路を取ったかは分からぬが、途中桜を見つつ散策気分だった。

武城春望 鳩巢 平・明・城・清・櫻(下平八庚)

陌上烟霞眺望平 山櫻花發自分明

滿川風雨舟緣岸 負郭樓臺水繞城

要路誰家車馬簇 儒門到處講論清

功名富貴終何益 只愧滄浪未濯纓

「訓読」陌上、烟霞、眺望平なり。山櫻花發き自ら分明たり。滿川の風雨、舟岸に縁り。負郭の樓臺、水城を繞る。要路、誰が家か車馬簇り。儒門到る處、講論清し。功名富貴、終に何か益あらん。只だ愧づ、滄浪、未だ纓を濯がざるを。

順庵邸へは神田川に添いながら長閑な田園を歩く道だったのだから。関東平野は「眺望平らか」で、所々に桜の花が眺められた。途中高門貴家の屋敷脇も通つたが、所々に門を構える儒家からは講論

の声も聞こえる。そんな御代に儒門に身を投じている以上、功名富貴は何の意味もなさぬ。世が治まり平穩な元祿の代にあって、本来なら櫻を洗って主に仕え、世のために役立たねばならぬのだが、未だ果たせていないのが恥ずかしい、と。師順庵もまた「功名富貴」から全く遠い、徳望の人として幕府に仕えている。そこを訪れば、その師の訓育が身を刺すように染みこむのである。

更に十日余り後にも鳩巢は、順庵を訪れた。今年順庵は七十二歳である。今回は私用だったのだろうか。前回途中で目にした桜の殆どが、路上に散っているのを見て、「世路に春も知らずで過行待る事嘆かしく」思い、馬上で詠じた作が「日記」に記される。「何事ぞ、東西車馬の客。往還世路春を知らず」と。職務に気を取られ、春の訪れに心も向けられぬゆとりなきに、俗塵に染まりつつある己を改めて思い知らされたのである。

こうして杜鵑の声を聞きつつやがて五月となり、昌興は鳩巢より次の七絶を贈られ、故郷への止みがたい思いを共にした。

楊柳緑垂蜀魄稀 武城遠客幾時歸 稀・歸・飛（上平五微）
行雲不入高人夢 日日江頭爲雨飛

〔訓読〕楊柳の緑垂るも蜀魄稀なり。武城の遠客 幾時歸らん。行雲は高人の夢にも入らず。日々江頭に雨と爲つて飛ぶ。

蜀魄は蜀の望帝が化したという杜鵑。柳の枝は緑美しい初夏となり、本来なら沢山来て鳴くはずの杜鵑も故郷に帰ってしまったのか声は稀である。楚王が高唐に遊んだ折り神女がその夢の中で、自分は朝には雲となり暮には雨となって陽台の下にあなたに会いに来ますと語ったというが、武城で客となつている自分には夢にも故郷が

あらわれることがなく、ただ自分の思いだけが雨となって故郷に飛びゆくだけだ、と。昌興もその心を返す。

故郷にしかじとてこそかへるらん山ほととぎす聲の稀なる
そして六月三日、綱紀に、綱吉の前で「中庸」の首章を講ぜよと君命が下った。かねて御三家が綱吉に講説を請うていたので、この日先ず綱吉が「大学」を講説し、その後綱紀が「中庸」を講説することになった。綱紀が文学に志が深いことを知る綱吉が、たつて要望したのである。「松雲公御夜話」に、「御三人様方へは御遠慮にて不被仰付候處、中将様（綱紀）へは御心易被思召、無聊遠慮被仰出候段、難有被思召迄にて御勤被成候」とあるように、御三家に講説を命ずるといのは、面子もあって申し出にくかったが、綱紀に対しては日頃の交誼もあって遠慮がなかった。綱紀にとっては大層緊張する役目であったが、綱吉の側用人牧野成貞からは前もって、格別言葉を改めて講説する必要はなく、平生通りでよいとのことであった。

座には綱吉の講説ということもあって、尾張大納言光友卿・紀伊大納言光貞卿を始めとして、甲府中納言綱豊・尾張宰相綱誠・紀伊宰相綱教・水戸中将綱條という錚々たる一族が左に座を占め、右には閣老近臣が座を占め、巍巍赫赫として晴れがましくも厳めしい場であった。順庵の「加賀普侯奉旨進講中庸記」にいう（注22）。

此日、大君上臨し、宗藩左に列し閣老近臣その右に侍り、天下の至嚴なり。巍巍たる台庭、赫赫たる公座に挺身して進講するは天下の至難なり。至嚴の地に坐し至難の説を演ぶ。而して道理明暢、詞辨流麗、文に闕義なく言に長語なし。これ志氣の

中に充ち、精華外に形はるる者に非ずや。

〔長語〕は長々とくどくどは。綱紀はひとことも滞ることなく素説を終え、冗漫な語はなかったとも夜話にいう。順庵は、それは孟子の説く「浩然の氣」を養っている故だという。浩然の氣とは、物事において動じない心、「自ら反りて縮くば、千萬人とも雖も吾往かん」という不動心である（注23）。心に省みてやましいところがなく、正しい己を見いだすならば何の恐れることはないで、たとえ千萬人の敵の中でも平気で出かける。綱紀もそれに同じで「侯の篤学致知は、天下の理において疑う所なく理解し、義においても心やましい所が全くないので、何も懼れビクビクすることがない。だからどんなに厳めしい場でどんなに至難な出来事に遭つても、全く心を動かすことがないのだ」と。

講終わつて綱紀は饗膳を賜り、食後は綱吉自ら仕舞いを十番あまり舞い、綱吉の養子綱豊や御三卿も望まれて舞い、綱紀も誓願寺を舞つた（注24）。加賀藩にとつて榮譽にあまる一日であった。

その晴れがましい六月も過ぎて初秋七月二日、小瀬助信が病氣で危篤となり、急遽実父の堀部養叔同道の下帰郷した。助信は鳩巢と同じく順庵門で勉学に励み、今は小将達の儒学教授として双壁を成し、年齢も鳩巢の二歳上の三十七歳であった。昌興は鳩巢に次の和歌を贈つた。

別れにしひだりみぎりの袖の露あき心ぞおもひしらるる
また基庸の元へも贈つた。基庸も助信の一歳下である。

さればよと思ひ合せし夢の世の果敢さ今は数もしられず
助信の症状は緊急を要する状態で、死去が伝えられたのは十一日だつ

た。信州坂木での絶命だった。鳩巢は報告を受けてすぐ悼詩を賦した。

（悼助信） 鳩巢 輝・歸・衣（上平五微）

穠雲無色月無輝 惆悵孤魂何處歸
自覺浮生更幾日 明朝復濕他人衣

〔訓読〕穠雲色無く、月に輝無し。惆悵孤魂 何處にか歸る。自らも覺ふ 浮生更に幾日。明朝復た湿す 他人の衣。

かけがえない友の死は、ただでさえ淋しい秋の雲から彩りを失わせ、夜空に澄み渡る月から輝きを奪い、愛でようとする気持ちも奪つてしまった。父を後に残し、友を失意の悲しみに置き去つて、君はどこに逝こうとするのか。されど思つてみれば、己のこの浮生も後幾日残されているだろう。明朝にはまた誰かの衣を沾らしているかもしれない。鳩巢の慟哭である。特に一句目は昌興の心を動かしてやまなかった。感慨に堪えぬまま賦詠した。

余波思ふ煙の末や残るらん秋の色なき月の光は

この時昌興は、同時に鳩巢から「挽詩」一篇を受け取つた。これは前年十二月三十日に鳩巢が賦した作であるが、助信の没を機に昌興達に披露したのである。「三十餘年の事。忽ち大夢の空しきが如し。百歳未だ半ばに満たず。一生既に云に終る。親朋相ひ聚りて哭す。我を送る 曠野の中。世に處ること良に久しきこと無し。泉に歸して安んぞ窮むこと有らん。書籍は塵土に委ね。形骸は蟻蟲に附す。只見る墳墓の地。青草春風に長ずることを」と。折しも時を得た作となった。

次いで七月十三日山本基庸の弟某も没した。そして十五日は彼岸で、前年八月四日に父政右を喪つた菊池武康にとつて初めての彼岸

である。金沢にあれば菩提寺に詣でて暮参し、読経の上亡父の浄土成仏を祈願したのであるが、江戸ではそれもままならなかった。

昨日けふはなき魂さへ立かへる時節、いとど故郷の空詠やり夜前の月など心くるしく澄のぼり、中々雨もふらなんと思はれ、心ほそくなど聞えけるま、申しつかはしける。

中々に雨もふらなん魂まつるゆふべの月の袖にくるしき

かくして七月は物思いをさせながら昌興に種々の和歌を詠ませて過ぎた。月を詠み、時鳥を詠み……

八月になっても昌興の所労ははつきりしなかった。家に籠りがちな昌興に、鳩巢から菊山注25との応酬作を贈ってきたのは十一日である。鳩巢が菊山に「秋暮」詩を贈ると、菊山がそれに和し加えて「懐旧」詩を贈ってきたので、更に鳩巢がそれに和したのである。共に早世した助信を懐つての作である。

和韻鳩巢主人秋暮 菊山 悲・之・時（上平四支）
薄暮悽然秋氣悲 孤魂不識復何之

月前却訝見顔色 座憶生平同傳時
「訓読」薄暮悽然秋氣悲し。孤魂識らず 復た何にか之。月前却て顔色を見るかと。座して憶ふ 生平傳を同じせし時。

月の美しい秋となつても、どうしてこんなにも悲しいのだろうか。それは助信を失つたからだが、それにしてもその魂はどこに行つたのか。短牆に昇つた月を見るとその顔色を見るようだし、坐しておれば平常と同じように、儒生に教を説いていた姿が傍に在るように思う、と。「同傳時」は、綱紀の儒臣としてその傍らに侍してきた年月。鳩巢はその年月を「十年の舊事」として賦す。

和韻菊山主人懷舊 鳩巢 悲・之・時（上平四支）
十年舊事終成悲 今日別君獨北之

「訓読」十年の舊事 終て悲と成る。今日君の獨り北に之くに別る。郷路縱然秋景好くとも。賞心何ぞ伴行の時に似ん。

十年間、助信と共に親しみ合つた年の数が、そのまま思い出と重

なつて悲しみの種となる。「北之」は、没した助信が墓場である北邸に赴くこと。また「郷路」は、やがて九月帰藩する帰り道。晩秋で美しい秋景色が見頃であろうが、共に観る助信がいないので、賞心はなんとも侘びしいことだ、と。

やがて中秋、一日中降っていた雨も初更頃には上がり、夜中過ぎには月も出てきた。その空にむかつて昌興が詠う。

必と思へばたがふ世中をこはりがほにくもる月かな
翌日には鳩巢からも五律が贈られてきた。

仲秋 鳩巢 樓・愁・秋・休（下平十一尤）
踈雨成涓滴 幽人懶倚樓 雲連江上暗 月入笛中愁

「訓読」踈雨涓滴を成す。幽人樓に倚るに懶し。雲は江上に連なりて暗く。月は笛中に入りて愁ふ。腸は断つ 他郷の別。夢は歸る 故国の秋。候虫 意有る如く。唧々と未だ曾て休まず。

笛は時として望郷の念で腸を断つ。李白の「春夜洛城聞笛」に「誰が家の玉笛か暗に声を飛ばす。散つて春風に入りて洛城に満つ。此夜曲中 折柳を聞く。何人か起さざらん故園の情」ともある。そは降る雨で一人客舎に坐して外を眺めていると、雲は大江をおおつて

月も見えぬ。そんな中、笛の音が聞こえてくる。そのいかにももの悲しい音を聞くと、生きて故郷へ帰ることのなかった故人を思つて腸を断つのだ。助信は、夢の中であっても故園に帰ることがあつたのだろうか。外では秋の虫が唧々と鳴いて止まぬ、と。したたる雨、悲しみや愁いでいかにも押しひしがれそうな空。そんな中、笛の音が聞こえる。あれはかつて李白が洛城で聞いた折楊柳の曲だろうか。それとも故郷に帰れず逝つた助信の涙だったか、と。

中秋は雨だったが、月は十六夜が美しかった。昌興は菊池武康達とこの月を詠じて贈答した。そして二十六日、能順が津田孟昭に従つて能登を一覽した時の発句集を落手した。孟昭が祖父玄蕃正卿の遠忌の法要のため総持寺に出かけるのに同行したのである。

そうこうして九月二十七日帰藩の旅に出た。この旅は鳩巢にとつて初めての同伴行で、昌興と共に道中を和歌や詩で綴つた注26。「文集」は新井白石や順庵との別離詩で始められている。

將赴賀陽奉簡順庵先生 鳩巢 生・平・瀛・榮・羹（下平八庚）
斯文倚重在先生 休欵金門奏太平
齒德俱高懸北斗 風霜比潔照東瀛
緇帷嘗辱十年誨 華袞肯分一字榮
征路杖几違杖几 何時廊廟當調羹

「訓読」斯文倚重 先生に在り。金門を欵きて太平を奏するを休む。齒徳俱に高く北斗に懸け。風霜潔を比して東瀛を照らす。緇帷には嘗て辱しむ十年の誨。華袞肯へて分つ 一字の榮。征路 杖几に違はんとするかと悽む。何れの時か廊廟に當に羹を調ふべし。

「斯文」は「論語」子罕に出る語で儒学をいう。孔子が匡で死の危

機に瀕した時発した語。斯文（文明の伝統）は文王姫昌を始祖とするが、文王が既に没した今でも斯文は確実に自分に受け継がれている。それは天が自分を通じて斯文を喪わせようとしていない証拠なのだ。運命に従う自分は、だからここでオタオタしないのだ、と。「倚重」は楽しみ重んずること。文学を楽しむ世に重んずる道は、順庵一身にある。だから文学の士が出仕するという金門を叩いて太平の世を奏する必要はない。先生の高い年齢や学徳は北斗星にも並び、風霜の潔さは我が日本を清らかに照らしている。自分はその門を叩いて十年間、その教誨を受けて、一文字をもないがしろにせぬ尊い贈り物を戴いてきた。これからその膝下を去つて任地に赴くのだが、先生を敬いその訓育に違ふことがないかと不安で心が痛む。しかしその教誨に従つて努力し、いつか政の表舞台に立つて五味を調理して羹を作るように、大政を見事に調理してみたいものだ、と。順庵の庇護の下を離れて自立し、大きな心よるべから離れて一人道を歩く、寂しさと覚悟を賦した作である。

そして順庵もその留別詩に応える。歳をとると後学の台頭を恐れるものだが、私も君の、大志をもつて学問に投じ、終には瀛州の十八学士にも名を列ねんとする意気を羨ましく思う。君の志す理義は、誰の口にも美味と感ずる芻豢の如く誰にも納得できることわりで、やがてその珠玉の学問をもつて故郷に錦を飾るのだ、と注27。順庵は鳩巢を「忠信篤敬にして聖學に志あり、英才博識にして専ら文場に美す」として、師について慎み深く君子の学を篤く志すその態度を嘉する。そしてその志す聖学が、やがて世の昌平をもたらすべく孔子の三千の門弟にも並び、その学問が成就して唐太宗の建立

した文学館に名を列ねた十八人の学士にも併称されようと賞する。そして最後に、母の待つ郷里に錦を飾るべく、祝い酒と共に顕谷の羹とも称すべき極上のご馳走を贈ろうと、餞するのである。

帰藩の行列が碓井関にさしかかったのは、出発してから三日目の二十九日、前日は本庄に宿泊しそこから高崎を経て、安中・松井田・碓氷の関を経て坂本の駅で宿泊の予定だった。ここまで来ると関東平野が眼下に一望され、前方にはこれから越えねばならぬ信濃の山並みが屹立していた。そして高みでは、雲は山上に生まれるのではなく谷間に生じ、晩秋の紅葉は眼下の小高い山々を彩っていた。「薄氷」東国に盡き。登望すれば羈愁を散す。山は信州に接して険しく。水は武野に連なりて流る。白雲 澗壑に生じ。紅樹 林丘を被ふ。帝子 一たび仙し去り。千年復た遊ばず」と。

碓氷の関からは煙を上げて聳える浅間山が見えた。鳩巢は「曾て前人の詠に入り。古今麗名を聞く」とも賦しているが、「前人詠」とは在原業平の詠である。「伊勢物語」に

むかし男ありけり。京やすみうかりけむ。あづまの方にゆきて、すみ所ともむとて、ともとする人ひとりふたりしてゆきけり。信濃國、浅間の嶽に煙り立つを見て

信濃なる浅間のたけに立つけぶりをちこち人の見やほとがめぬとあるのをいう。常に煙を吐く浅間山は、遠くからは見る者を圧し、その姿は仙人が霊葉を練る巨大な竈の煙に見え、また雪積む磊々たる山肌は、圧するごとく目に迫った。

そしてこの浅間山は、先行していた昌興が既に前日、桶川から本庄に向かう時に遠望して

樹間隠見行人影 疑是故郷衣錦回

「訓読」山上の浮雲雨を送りて来たる。路辺の紅葉花の開く似し。樹間に隠見す 行人の影。疑ふらくは是れ故郷に衣錦して回るかと。信濃の山道は上下が甚だしい。その山中の紅葉の樹間を行く行列を鳥瞰すると、錦を着て故郷へ帰る富貴者の行列に見える、と。山の高みからは、蛇行して行列する一行が延々と続き、それが山の紅葉に映えて錦を着て帰る姿に見えた。やがて十月二日、早朝田中を出た行列は、昼前に坂木の駅にさしかかった。ここは三ヶ月前の七月、亡友小瀬助信が客死した所である。共に感慨が一人でなかった。柳の駅を待ると、此秋小瀬助信此所にて身まかりしこともひいでて

昌興

さらしなや里の草葉も霜かれて露の形見の色としもなし

過阪木憶亡友小瀬助信是歲初秋助信賜告北旋到此没於逆旅

鳩巢 留・秋・遊（下平十一尤）

故人臥病此遲留 玉樹飄零不耐秋

今日經過蒿里曙 孤魂空伴白雲遊

「訓読」阪木を過ぎ、亡友小瀬助信を憶ふ。是の歳初秋、助信告を賜ひ、北に旋り此に到りて逆旅に没す。故人病に臥して此に遲留す。玉樹飄零して秋に耐へず。今日經過す蒿里の曙。孤魂空しく白雲に伴ひて遊ぶ。

助信が没したのは初秋七月の初旬である。それから三ヶ月も過ぎると、美しく色なしていた草木もすっかり霜枯れて、その時の様を知らせる面影すら残っていない、と昌興が詠う。

三十七歳での生涯はあまりにも短い。藩士を教導すべく、儒臣の

浅間の嶽のはるかに烟うちなびくを見て

をちかたの空にぞしたふ浅間山この夕かげにたてる煙を おもかげにたつや浅間の夕煙又いく秋をかけてしのばんと歌ったが、これも『伊勢物語』を下に敷衍しての歌である。

二十九日は九月のつごもりで、先見していた昌興は既に碓氷関にさしかかっていた。山道は一面紅葉に彩られた別世界であった。

いとせめて秋の形見に紅葉ばをちらさで残せ四方の山風 碓氷の関にさしかかるほど

暮れて行く秋もろ共にと、めなば関のこなたに草枕せん山上から眺める紅葉の美しさを詠じたのであるが、明日から季節は冬になるからといって、紅葉を散らすなよと呼びかけたもの。また一首は、晩秋の日ざしは早くに暮れるが、もしその日没を引き留めることができるなら、碓氷峠の手前で旅寝して秋のままにしておう、と鳩巢に詠いかけたもの。

それにしても紅葉の山越えは絶景だった。鳩巢もこの日は六首をものしている。「從安中至松枝路邊有紅樹如花」「白雲山」「陟薄氷山」「歩行甚疲逢牧童借牛而乘」「山路詠紅葉」「浅間山」である。安中より松枝に到る山中の路邊では、「無辺の紅樹 春を挽回し。正に是れ千林揺落の辰」と詠い、碓氷関を越える頃には、「白雲 澗壑に生じ。紅樹 林丘を被ふ」とも詠った。時に晩秋、全山を錦と染める紅葉はさながら春の花びらで、全山を染める紅葉が花と化して「揺落」する時節である。小諸着は初冬十月一日である。

將到小室遇雨紅樹可愛 鳩巢 來・開・回（上平十灰）
山上浮雲送雨來 路邊紅葉似花開

中でも重要な一人であった。その没を悼む鳩巢については先述したが、ここでその没した場所に巡り合わせてみると、感慨は一人であった。「孤魂空しく白雲に伴ひて遊ぶ」とあるが、助信の魂は、今、天帝の郷である仙郷にあつて、人間的な苦悩から解放されて白雲に乗って遊んでいる、というのである。

『莊子』外篇「天地」の中で、華の町の封人と帝堯とのやりとりを述べて封人がいう。「夫れ聖人は鶉居して穀食し、鳥行して羈るることなし。天下に道有れば則ち物も皆昌え、天下に道無ければ則ち徳を脩めて間に就き、千歳世を厭え去りて上僊し、彼の白雲に乗じて帝郷に至る。三患至ることなく、身は常に殃いなければ、則ちなんの辱ずかしめか之れ有らん」と。「三患」とは、人間世で尊ぶ男子・富貴・長寿への三つの欲望である。堯帝は、この欲望が人生での苦痛の種だという。上僊して仙郷に至れば、この三患から自由になって身に一切の災いのふりかかることもなく、白雲に乗じて遊ぶことができるのだ、と。そして鳩巢も詠う。今日その没した地に来てみると、君の魂はすっかり人間世の束縛から解放され、一人白雲に乗じて上仙世界に遊ぶのが見える、と。儒者として徳を修めた助信の、君子然とした生き様を頌えたのである。

参勤の行列はこの後、善光寺・荒井・能生・境・魚津・高岡・津幡と七泊を経て、金沢には九日早朝に着いた。

この道中記が初めから意図されたかどうかは別にして、紀行を共に記したことは、二人の人生にとって結果的に意味が大きかった。鳩巢が、単なる記録とも思える作を「文集」に残したのも、昌興とのかかわりの糸をそれとなく留めたかったのかも知れない。

この間、行列が魚津に止宿した六日に、高山城引渡しが無事終了した由の書状を受け取っている。引渡しは十月三日に幕府の使者浅野伊右衛門より行われ、以後永井正良が城番を勤むべき旨が記されてあった。手紙は、この後の運命を露知らぬ昌興によって書写されたのも皮肉である。そして金沢に着いて間もない十四日、半田惣兵衛の高山在番が申し渡され、来年の四月一日をもつての交代とも定められた。

やがて十月十七日戸室山に初雪が見られ、二十日過ぎには時雨模様となり、二十九日には初雪が積った。観月亭から見ると、落ち尽くさずに残っている紅葉が白雪を戴き、その下の緑なす苔をまだらに白く染める様は、興趣置く所がなかった。

霜枯の庭の芝生にちりつもる落葉まばらにはつ雪ぞふる

そして十一月十二日、昌興は城中で五十川剛伯と会い、そこで中秋に賦した作を落手している。

中秋翫月梧月軒書懷 源 剛伯 鮮・賢（下平一先）

雨霽園林露未乾 雲開河漢月初鮮

吟懷照得梧桐影 獨立秋風憶古賢

〔訓読〕雨霽れて園林に露未だ乾かず。雲開けては河漢、月初めて鮮なり。吟懷照し得たり。梧桐の影。獨り秋風に立ちて古賢を憶ふ。

剛伯の書懷梧月軒には、梧桐が趣を作っていたのであろう、その葉末からかいま見える月を眺めつつ、古聖賢を思うというもの。次いで十二月一日剛伯は『詩範』一部九冊を撰述して綱紀に上程した。そして晦日を迎えたが、この日は立春とも重なっていた。

けふに暮る行なるとしに春たちて名残もいづらたどらる、かな

聞き、白獸樽の蓋を開けて、ぜひとも小臣に飲ませてほしい。儒家たる自分は、その傍らに待すこともままならぬので、一人書窓で古の聖賢の書物を読んでいる」と、訴えているのである。

『加能讀史年表』によれば、元禄五年冬「既にして兵員の録進、綱紀の意に適せず」とある。これで見ると、既にこの時点で惣兵衛が兵員の減少案を具申していたらしい。その具申を綱紀は内心快からず思い、惣兵衛の罷免等を内々に検討し、ふと漏らすこともあったのかもしれない。昌興が諫言の意志を持ってなおかつ実行しなかったのは、惣兵衛の処置が正式に申し渡されなかったからで、既に一日時点で昌興は半ば覚悟を決めていたのであろう。

諫言こそは政道を善に導き、国に天の韶光を雨と降らせる。延宝五年（一六七七）に鳩巢がその序を書いた『陽廣公偉訓』の光高の言である。「貴きも賤きも諫言をなす者に怒ること勿れ。向後の行をなほさんと思ひ、心をしづめ会得すべし。諫言は其人の為を切に思ふが故なれば、其人を深愛し、又は品により大に賞すべし。縦令諫言非なりとも當座に不可背。其座をすぐし、是非得失分別して、失を捨て得とれ。若忿り背く心あれば、二たび諫言を成者なし。諫言なければ自の邪曲を不知して、悪名を得て必ず災来る者也。柔和にして禮をあつくすべし」と。まことに名君の言である。光高は政道の妨げとなるものとして、「修・好色・多欲・慢・佞奸」の五を挙げてこれを戒めとし、特に佞奸は「邪にして賢」、修は「上をかすめ、忠なくして諸人の上に立んことを常に思ひ、己にます者あれば其人の非をあげ上へ讒し、徳あるをそねみ、諫言を嫌ひ、西を東へとも吾言に従ふ軽薄多き者を近くるに依て、佞奸のみ聚りて愈よ心修り、

と歌った。そしてこの日をもって「日記」は終わるが、後に補された『葛巻筆記拔書』には、元禄六年の手記の抜き書きが残り、中に鳩巢の元日詩が残るのでそれを示して本稿の結びとする。

元日 室 鳩巢 天・連・年・前・編（下平一先）

鐘漏聲稀向曉天 高城淑氣五雲連

三朝膏雨散初澤 六出瑞花迎有年

上國衣冠鵷列裏 小臣拜舜獸樽前

儒家門外經過少 獨對書廳讀舊編

〔訓読〕鐘漏声稀にして曉天に向かひ。高城の淑氣に五雲連なる。三朝の膏雨、初沢に散り。六出の瑞花、有年を迎ふ。上國、冠を衣る。鵷列の裏、小臣、舜を拜す。獸樽の前、儒家門外に經過するもの少く。独り書廳に對ひて旧編を読む。

暁を告げる鐘が間遠になるにつれて夜が明け初め、城を新春のすがすがしい気が五雲となって包み込む。そして新年の恵みの雨が徳沢となって万物に降り注ぎ、六出の雪華が豊年を予期させて空に舞う。城中には冠を着けた上卿達が盛装して居並び（鵷列）、小臣は白獸樽の前に坐して舜帝なる綱紀を拜している。しかし儒家の門外には人の行き来する者は少なく、一人書窓でいにしへの聖賢の書を読む、と。鳩巢にしては珍しく祝意の多い賦である。

しかし七首目の「小臣拜舜獸樽前」はどこか意味ありげである。小臣は昌興を指す。「白獸樽」は、正月元日君主の前において直言を奉ずる者があれば飲ませる、蓋に白獸の形のある酒樽をいうからである。既にこの時鳩巢は昌興の真意を知っていて、「小臣が諫言を奉じようとしている。だから舜帝のごとく徳高い綱紀はその言をよく

いみはばからず。上の威光を借て、下たる者に臂をはり、目をいらげ、己が心に遇されば正を邪とすに因て、政すたれ国家亡る者也」といって、国を滅ぼす元凶と忌避する。また繰り返す。「諫言耳にさかひ心に違ことあらば、必善言ならんと知べし。心に恰の言あらば必悪事ならんと心を附よ。讒言を以て人を誤こと勿れ」と。鳩巢が一人書窓で読むのも、そうした諫言を重んじた聖賢の書である。君主たる者、臣下の諫言こそ尊ばねばならぬ、と。

昌興は、己の行動は引き返せぬ一本道であることを覚悟している。武士が節義をもつて諫言を奉ずる以上、後の処遇は黙って君主の裁定に委ねるしかない。かつては義に殉じて切腹する道もあったが、それも既に封じられている。加えて一度覚悟を決めると、誰のどのような忠告や説得にも昌興は耳を貸さないことも、鳩巢は知り尽くしている。それが節義だからである。生命が惜しく、名誉に名残がある位なら忠諫に及ばない。昌興が主命によって津向村に謹慎していた時、その看守に次のように話したという。「古の戦場に赴きて国難に殉ぜしもの多し。而して我が志も此の如し」と^{注28}。昌興の忠諫こそは、こうした士道に基づいていたのである。

鳩巢の詩にはその諫言の影すらないが、静かに坐して義理のあるべき姿と、生命を賭してその義を訴える昌興への思いが刺さるように伝わる。この昌興の出来事からほぼ十年後、江戸を震撼させた赤穂事件の顛末を収集し、「赤穂義人伝」として世に問うた鳩巢の、ギョツとするような視線をこの作も持っている。冷静に観察しつつ、義に対する篤い信念は揺ぐことなく透徹した視線の奥に潜む。既に鳩巢もまた生命を賭していたといえる。

注1. 『本朝文集』巻八十。なお藤原爲景は藤原惺高の長子で冷泉爲純の孫。冷泉家を嗣いで和歌を能くし、中院通村や水戸光圀等と交流があり、歌集に『冷泉爲景朝臣歌集』がある。

注2. 群書類従『柿本影供記』、『柿本講式』等であり、研究として片野達郎『「人麿影供」の変遷と和歌史的意義』(『東北大学教養部紀要』第4号)、山田昭全『柿本人麿影供の成立と展開』(『大正大学研究紀要』第51輯)、佐々木孝浩『六條頭季郎初度人麿影供歌会考』(『国文学研究資料館紀要』第21号)等多数あり、著者にも仏教者と和歌との関わりを論じて「和歌政所結縁経表白と狂言綺語観の変形」(『金沢大学国語国文』第29号)がある。

注3. 『金沢大学国語国文』第45号「加賀藩と室鳩巢」も参照。

注4. この塾則は、天明七年(一七八七)二十四歳で駒込に開塾した錦城が浅草に移り、翌八年に諸生のために「入門三義」を示し、更に三年後の寛政二年(一七九〇)改めて「塾約十五則」を定めたもの。引用はその第六則である(『春草堂集』巻七)。

注5. 作隆は知隆とも称し元禄九年父の跡目を嗣いだ(由緒帳)。

注6. 『文集』とは一部語句に相違があるが「日記」に従う。

注7. 『可観小説』巻三十八・「日記」閏八月二十二日条。なお前田恒長は三千二百石を食む藩臣で、田中一閑は江戸で吉川惟足の高弟。二十人扶持を受けて江戸藩邸において毎月「古事記神代巻」を講じている(『名家由緒』等)。

注8. 桜井知親は爲兵衛正可の三男で、延宝五年二十二歳で新知

百五十石を受けて奥小将に列し、元禄三年には五十石を加えていた。板津直景は未詳だが、富山藩士の板津直員かと推測する。

注9. 「日記」閏八月九日・九月九日条等。由比正及は勘兵衛昌清で、延宝六年召し出されて三百石を拝領し、元禄四年には聞番(江戸邸に居住する留守居役)にあった。また前波正晴は久兵衛か小左衛門であろう。共に御馬廻組にあつて二百石を拝領する。能順については綿拔豊昭氏著『小松天満宮と能順』もある。

注10. 『文集』巻二「秋懐」其三。

注11. 『云卿補任』等。

注12. 『加能郷土辞彙』・『石川県史』等。

注13. 『石川県史』第三編第四章第八節。

注14. 竹隠は伝未詳。忠張は父忠種の禄三千五百三十石を襲いだ藩士で奏者番を勤め、一方で鳩巢に師事して聯歌を好んだ。昌興とは幼少の頃よりの交遊があり、昌興が十八歳頃能登に遊んだ折りも消息を送っている。

注15. 息の中納言資茂は同年七月に三十八歳で没し、父の大納言弘資も息の後を追うように翌八月二十六日七十一歳で没した。(『公卿補任』・「日記」貞享4・10・13条)

注16. 『云卿補任』等。

注17. 『蒙求』袁安倚頼。

注18. 朱舜水が天和二年四月没したので、翌年順庵は幕府から儒者として招かれていた。

注19. 以上「日記」一日・五日・八日条。田中式泰は一閑の婿養子。京の卜部兼教に就いて唯一神道を学び、貞享三年綱紀に仕えて

(附) 昌興日記に見る鳩巢詩

文中(一)は「日記」の日付で、「」は金沢大学国語国文の号数。なお詩文は全て「日記」の表記に従った。また題号の(一)表記は私意による題号である。

1. 貞享三年(一六八六)三十一歳
昌興の贈歌に対して(1月6日)

(元且) ※一部のみの掲載。

親闈在邇奈人遠 惆悵問安依早梅

直清謝以詩歌(1月6日)

[第45号所載]

一枝何處梅 寵贈草堂來 清香復寒色

春意共花開

② 和源眞夫韻兼呈諸公 丹直清(1月21日)

鄂歌一曲最清新 青眼相逢各自眞

寶主風流何所似 梅花席上數枝春

③ 再和眞夫韻 丹直清(1月21日)

半夜清談玉露新 燈前話舊故情眞

寒梅藻詠競幽興 正是風流一種春

④ (和昌興和歌)(2月15日)

春月無心入夜扉 舊遊拋我信音稀

唯聽寂寂松風聲 獨促幽思嚙沾衣

⑤ 直清即和韻(2月15日) ※昌興の和歌に対して

閑夜月明独掩扉 名流當代似君稀

待乘閑暇重相訪 應使松風滿客衣

二十人扶持を受けた。里見元辰は治左衛門興元の嫡男だったが、同族の七左衛門元茂の養子嗣となった。元茂は千二百石を食んで馬廻組に町奉行を兼ねていたが、元禄二年病氣のため隠居したのを受けて元辰は、同年召し出されて大小將組に班して近習に加えられ、同三年千二百石を継いだ。元茂の妻室は昌興の祖父昌俊の娘で昌興にとって叔母にあたる。多賀直方は豫一右衛門直定の次男で、綱紀の奥小將組に班して二千石を食む直秀の弟。寛文六年十六歳で奥小將に召し出され、以後加増を重ねて元禄五年には六千石を拝領して人持組に班している。兄は事あつて能登に謫せられたが詩歌に巧みで、直方も同様和歌を能くした。(『名家由緒』『加賀藩士由緒帳』等)。

注20. 『文集』巻三にも載せる。

注21. 木下一雄『木下順庵評伝』第三章(国書刊行会刊)。

注22. 『錦里文集』巻十六。

注23. 『孟子』公孫丑。

注24. 「日記」同日条。

注25. 菊山は未詳、菊池武康か。

注26. 昌興の作は「日記」の他に『松雲公遺編類纂』に『北州紀行』として載せるし、鳩巢の作は「文集」巻三にまとめられる。

注27. 『錦里文集』巻八「鳩巢室生吾門益友也。忠信篤敬、有志聖學、英才博識、專美文場。不日將歸郷里、忽有留別瓊贈、走筆和答、以華行色」による。

注28. 『石川県史』第二章「加賀藩治恢弘期」第四節「極盛極治」

⑥ 旅隱花 丹直清（3月26日）

白櫻新發傍柴扉 席上風來香滿衣
今日對花故鄉客 暫時相樂莫思歸

⑦ 藤昌興雅丈賜前庭櫻花感其厚意乃賦詩且以和韻謝之

（3月28日） [第45号所載]

一枝滿手賞心香 艷々花房映草堂

厚志無窮更堪報 雅懷終日詠吟長

⑧ 藤昌興寄和予詩予再用前韻報之 丹直清（3月28日）

翰墨銷春常掩扉 瓊瑤忽至照人衣

尚思嘉會烟霞晚 倥傯獨携餘興歸

2. 貞享四年（一六八七）三十二歲

この年鳩巢の作は載せられない。

3. 貞享五年（一六八八）三十三歲

① 應藤昌興之招到駒込舊宅（1月26日）

[第46号所載]

賓主相逢誰與親 間闌黃鳥報青春

墻頭獨有兩松樹 不改舊陰對舊人

② 和韻藤昌興見寄（1月27日）

一間矮屋惟松聲 終日無人緣竹清

戶外黃鶯求友意 酒盃翰墨慰吟情

③ 追和前韻述餘意（1月27日）

簷外青松十里聲 主人風韻箇中清

不知今日一筵興 又惱將來幾度情

④ 庭前の櫻花一枝を昌興が贈った返し（3月13日）

一樹庭櫻方簇辰 故人相送賞心新

若非君愛風流意 客裏何看滿坐春

⑤ 松風亭即事 室直清（12月3日）

良夜招尋繼舊盟 文筵不厭主人情

青松永結歲寒約 為報清風滿座聲

4. 元祿二年（一六八九）三十四歲

この年鳩巢の作は載せられない。

5. 元祿三年（一六九〇）三十五歲

① 雨中歸鴈 室直清（2月24日）

[第46号所載]

半夜雲深何處歸 陰風寒雨可難飛

一聲忽動故鄉思 燈下寂寥沾客衣

6. 元祿四年（一六九一）三十六歲

①（歲首） 室新介直清（1月3日）

城西卜築愛幽遐 白屋迎新眺望賒

天上雲霞分晦朔 人間氷雪阻鶯花

百年身恥雕蟲技 竟日門無長者車

自此閑來春誦好 為欣青帝到儒家

②（即事）（5月12日）

[第47号所載]

空庭經雨後 日日長青苔 林暝樹如咽

故園梅已熟 客舍筭將催 蜀魄不飛去

天低雲似灰 聲聲猶吐哀

③ 和山居韻 室直清（8月8日）

一臥東山歲月遙 衡門晝掩草蕭蕭

從來不負蒼生望 自分疎慵違聖朝

蒼生望秦謝安之故事云云

④ 中秋所懷 室直清（8月16日）

[第47号所載]

雨散前林烟未收 清風白露思悠悠

雲端仙鏡有時見 池底影娥何處求

寒雁難傳千里信 候蟲空報四隣穉

今霄料得同寅會 一座笑談在北州

⑤（有感） 鳩巢主人（閏8月28日）

[第47号所載]

欲曙郎君顛倒裳 自公來召吏人忙

中庭若使鉏斃看 不惜碎頭槐下僵

⑥ 秋懷詩十首（9月6日）「鳩巢文集」卷二所収。

⑦ 對雪（11月17日）

清且黃雲合 初看素雪飄 欺花多間葉 壓竹半封條

侵野且漫積 入池忽自消 前林堪畫處 千樹列瓊瑤

⑧ 酬藤有禎父病中賦初雪和歌見示 直清（11月18日）

[第47号所載]

海風吹雪到簷端 寒入曙廳夢半殘

臥病日高知未起 故人清節似袁安

7. 元祿五年（一六九二）三十七歲

① 壬申元旦（1月5日）

「鳩巢文集」卷三所収。

② 花下與友人酌酒 鳩巢主人（3月3日） [第47号所載]

隣人有意折花來 相對殷勤停酒杯

吾生縱得者稀壽 自此逢春三十回

③ 武城春望（3月6日）「鳩巢文集」卷三所収。

④（訪貞幹）（3月15日）

山櫻曾見發花新 今日重來半委塵

何事東西車馬客 往還世路不知春

⑤（贈昌興）（5月19日）

[第47号所載]

楊柳綠垂蜀魄稀 武城遠客幾時歸

行雲不入高人夢 日日江頭爲雨飛

⑥（悼助信）（7月12日）

[第47号所載]

穉雲無色月無輝 惆悵孤魂何處歸

自覺浮生更幾日 明朝復濕他人衣

⑦ 挽詩（7月12日）「鳩巢文集」卷一所収。

⑧ 秋暮（8月11日）

暮鐘何處發 流響到空堂 傍屋蜘蛛網 趨林鳥雀翔

窻前親翰墨 雲際指家鄉 月出忽回首 清輝有短牆

⑨ 和韻菊山主人懷舊 鳩巢（8月11日）

[第47号所載]

十年舊事總成悲 今日別君獨北之

鄉路縱然秋景好 賞心何似伴行時

⑩ 又（8月11日）

秋天千里月 清影滿虛堂 永夜故人話 半空新雁翔

望親吟陟配 對友共思鄉 醉後常高枕 二更雨洒牆

⑪ 酬有禎兄以和歌見示因和糸字 滄浪（8月12日）

白一締交經幾時 行年未老鬢先衰
生平愁緒知多少 都入鏡中化作糸

⑫ 仲秋 滄浪（8月16日）

〔第47号所載〕

疎雨成涓滴 幽人嬾倚樓 雲連江上暗 月入笛中愁
腸斷他鄉別 夢歸故國秋 候蟲如有意 唧唧未曾休

8. 元禄六年（一六九三）三十八歳

① 元日 丹直清（1月13日）

〔第47号所載〕

鐘漏聲稀向曉天 高城淑氣五雲連
三朝膏雨散初澤 六出瑞花迎有年
上國衣冠鴈列裏 小臣拜舞獸樽前
儒家門外經過少 獨對書牕讀舊編

② 酬藤有禎對花述懷和歌 鳩巢（3月2日）

〔第44号所載〕

滿城桃李路塵中 靜處看花自不同
月夜清香須愛翫 明朝乱落任春風

室生犀星『王朝』における『大和物語』の受容

——「春菜野」を中心に——

孫 媛 媛

一 はじめに

一九四〇年に、室生犀星は『大和物語』や『伊勢物語』、謡曲などに取材して王朝小説の創作を始めた。これらの作品は様々な方面から批評されている。その中で、『大和物語』取材作品については、次のように議論されている。

本多浩は「大和物語」を素材としても、その素材を、また王朝の世界を忠実に描きだすことではなく自由奔放に自己の世界を創りだす」と述べている。また、志村有弘は「第二期は、昭和十六年に『王朝』が刊行され、『蟲寺抄』・『余花』・『玉章』が刊行されるにいたる、昭和二十二年頃までの時である。（中略）第二期は、古典文学を踏まえながらも、想像を自由に飛翔させ、ある時は原文からは和歌のみを採録して、他は作者の創作という場合もあり、作者自身が古典の世界にまことに自由に遊んでいる感じがする時代である」とする。どちらとも犀星が『大和物語』から取材しつつも自由に想像し、創作したかのように論じている。

さらに、高瀬真理子は「大和物語」の「蘆刈」を分析しながら、「萩吹く歌」の生絹が「運命に流されるいにしえの女ではなく、すでに自我の確立した近代の女性の一面を持っている」冷たい女であると指摘している⁵。そして、安田義明は「彼女たちはな」を『大和物語』の「生田川」と比較して、橘の死の時間や方法はその死に必然性を与えていると結論付け、改められた和歌から「生への未練」を見出している⁷。つまり、具体的な作品を解釈する際にも犀星の独創性が中心に論じられており、『大和物語』からよく取材できて自由に発想し、創作したという印象にとどまっている。

これらの議論は『大和物語』取材の順調さや、創作の自由さ、そして作品の価値を肯定しているように見える。『大和物語』を典拠にして書かれたものの成功が強調されている。小説が成り立つまでの全過程で、犀星は何の難問にもぶつからなかったかのようである。

しかし、犀星と折口信夫の対談⁸では、異なる状況が示されている。そこで、折口が「文芸春秋に出たあれは、何でした」と聞くと、犀星は「あれはいろいろな話をあつめた行方です。どうもあの時代